

## ヨハネによる福音書13章21-38節 「神の愛の栄光」

### 1A 裏切り者への愛 21-30

1B 当惑する弟子たち 21-24

2B 浸したパン切れ 25-30

### 2A 間もなく去られるイエス 31-38

1B 互いへの愛 31-35

2B 付いていけない弟子たち 36-38

## 本文

ヨハネによる福音書 13 章を開いてください、私たちは前回、13 章の前半部分を、1 節から 20 節までを読んでいきました。今朝は、後半部分、21 節から 38 節を一節ずつ見ていきます。前回の学びを思い出してください、イエス様は過越の食事の席において、弟子たちの足を洗われました。そして、主であるわたしがこうしたのだから、あなたがたも互いに足を洗いなさいと命じられました。イエス様は、ご自身が父のみもとに行く時が近づいているので、最後まで、極みまで、ご自身のものとされた者たちを愛されていたのです。

ところが、そこでその場にいられなくなる者が出てきます。イスカリオテのユダです。十二弟子の一人としてイエス様は彼を選んでいましたが、神が本当に選ばれていたわけではありません。イエス様のものとされていなかったのです。分かり易く言えば、クリスチャンとしてふるまっていたのに、全く救われていなかったのです。それで、最も親密な交わりであり、食事の席において、しかも、イスラエルの救いを思い出す過越の食事の席において、イスカリオテのユダは出て行かなければいけなくなりました。地獄というものは、どういうところなのかわかるような気がします。地獄とは、神のこの上もない愛が注がれているところに、その愛によって人々が一つにされているところに、それを最も憎み、拒んでいるところでもあります。愛があるところには、光があり、光があるので、闇はそれを憎むのです。

### 1A 裏切り者への愛 21-30

1B 当惑する弟子たち 21-24

21 イエスは、これらのことを話されたとき、心が騒いだ。そして証しされた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。あなたがたのうちの一人が、わたしを裏切ります。」

イエス様はこれまで、それとなく裏切る者がこの中にいることは、話しておられました。「13:10 あなたがたはきよいのですが、皆がきよいわけではありません。」と言われ、また、「13:18 聖書に

『わたしのパンを食べている者が、わたしに向かって、かかとを上げます』と書いてあることは成就するのです。」と言われていました。そして、今、はっきりと裏切り者がここにいると証しされます。

主は、「心が騒いだ」とあります。主がご自分の心が騒がした時のことを思い出しますと、初めに、ラザロの死によって、マリアとユダヤ人たちが泣いているのをご覧になった時です(11:33)。そして、エルサレムで、ギリシア人がイエス様に会いたいと言ってきた時、ご自身が死なれることを予告する時でありました。「12:27 今わたしの心は騒いでいる。何と言おうか。『父よ、この時からわたしをお救いください。』と言おうか。いや、このためにこそ、わたしはこの時に至ったのだ。」どちらにおいても、共有したことがあります。それは、「別れる」ということです。死によって、ラザロとマリアや他の人たちが別れてしまった。そしてイエス様ご自身が、十字架に付けられる時に、父なる神から引き離される、見捨てられるという経験をなさいます。別れるというのは、死を意味することを以前、説明しましたよね？ 結ばれているものが別れる時に、イエス様の心が騒いだのです。

ここでは、弟子たちの仲間から、イエス様にある交わりから、一人の者が自らの意志で離れて行くことを目の前にして、主は心を騒がしたのです。

22 弟子たちは、だれのことを言われたのか分からず当惑し、互いに顔を見合わせていた。

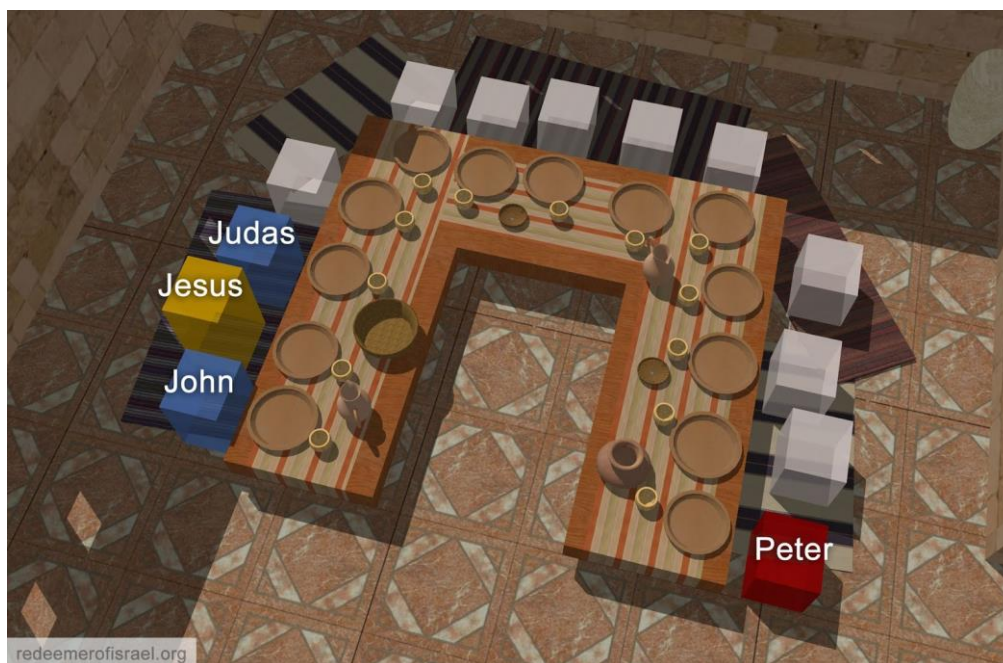
弟子たちは、全く、さっぱりわからずに当惑してしまいました。互いに顔を見合わせています。つまり、イスカリオテのユダが裏切るなどと、これっぽっちも思っていなかったのです。彼は、弟子たち一行の財務係をしていましたから、イエス様から相当の信頼が寄せられていると弟子たちは思っていました。信用できる人にしか、そのような務めを任せません。ところが、イスカリオテのユダは、誰にも知られない形で金入れを預かりながら、そこに入っているものを盗んでいました(12:6)。イスカリオテのユダの闇の深さは、その闇が誰にも知られていなかったというところにあります。イエス様にしか知られていなかったということです。それほど人を欺き、自分を欺いていました。しかし、言い換えれば、イエス様によってのみ、初めて人の闇が明らかにされるということです。イエス様がおられるところには、居られなくなるということです。

23 弟子の一人がイエスの胸のところで横になっていた。イエスが愛しておられた弟子である。24 そこで、シモン・ペテロは彼に、だれのことを言われたのか尋ねるように合図した。<sup>1</sup>



<sup>1</sup> <http://www.redeemerofisrael.org/2012/04/setting-of-last-supper-triclinium.html>

ここが、前回お話しした、当時の食事の席のことです。当時、座るのはトリクリニウムと呼ばれる、コの字になっている円卓で、お膳と同じぐらいの高さです。そこに座るといよりも、肘をついて横になるようにして食べていました。そして、食事の席は、そのコの字の左側、手前から二番目の席が、食卓の主が座ります。そこに、イエス様が座っておられました。



その手前は、外敵がやってきた時に、主人を守るために座る席でした。ルカによる福音書には、この食事の席に弟子たちは剣を持っていることをイエス様に話されましたね？そこにヨハネが座っていたと考えられます。なぜなら、ここでイエス様の胸のところまで横になっているのが、「イエスが愛しておられた弟子」とあるからです。ヨハネが横たわっていると、その頭の後ろには、イエス様の胸の辺りになるからです。

そして、この後に、イスカリオテのユダが、イエス様からパン切れを受けることが書かれているので、イスカリオテのユダは左側の、イエス様の横、奥のほうの席にいたと考えられます。食事の席の主人のほかに、最も重んじられている、歓迎されている席がそこになります。そして、ペテロは、右側の、一番手前の席に着いていたと考えられます。ヨハネにそのまま、誰のことを主が言われたのかを尋ねさせているからです。ちなみに、ペテロの座ったところが、いろいろ給仕ができるところで、しもべの席になります。ですから、イエス様がペテロのところに来て、足を洗われたというのは、とてつもない恐れ多いことだったのです。

ところで、使徒ヨハネは、福音書を書くにあたって、自分がいかに主から愛されていたかを、まるで自慢しているかのように書きます。そして、ここでは特に、主の胸のそばにいたことを強調しているのです。主にそれだけ、物理的にも近づいていて、その胸のところまで近づいていたのです。

<sup>2</sup> <http://www.redeemerofisrael.org/2012/04/setting-of-last-supper-triclinium.html>

ここにこそ、いのちがあることをヨハネは知っていたのです。第一の手紙をこう書き始めています、「Iヨハ 1:1 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、自分の目で見たもの、じっと見つめ、自分の手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて。」

## 2B 浸したパン切れ 25-30

25 その弟子はイエスの胸元に寄りかかったまま、イエスに言った。「主よ、それはだれのことですか。」26 イエスは答えられた。「わたしがパン切れを浸して与える者が、その人です。」それからイエスはパン切れを浸して取り、イスカリオテのシモンの子ユダに与えられた。

ヨハネは、イエス様とは逆のほうを向いて横たわっているので、向きを変えるよりも、そのままイエス様のほうに横たわるような感じで、尋ねました。主は、「わたしがパン切れを浸して与える者が、その人です」と言われます。これは、過越の食事の中で、ハロセットと呼ばれる者です。煉瓦を表す色を出すために、リンゴやナッツ、蜂蜜などを入れます。そこに、種なしパンを入れて、それをイスカリオテのユダに渡されました。

主がここでイスカリオテのユダに渡したのは、犯人を見つけるためのようなものではありませんでした。今も、ベドウィン(遊牧民)の習慣にわずかに残っていますが、当時、こういう意味があったそうです。「食事の主が、パン切れを浸して客に与えることは、人間に対して行う最も栄誉なこと。命を捨てるほど、あなたは大切な方です、という意志表示とのこと。「あなたは私の兄弟、わたしはあなたのために、喜んで死にます。」という意味がある」そうです。<sup>3</sup>つまり、これは、イスカリオテのユダのために、わたしは喜んであなたのために死にます、ということです。敵に対する愛そのものです。

27 ユダがパン切れを受け取ると、そのとき、サタンが彼に入った。すると、イエスは彼に言われた。「あなたがしようとしていることを、すぐしなさい。」28 席に着いていた者で、なぜイエスがユダにそう言われたのか、分かった者はだれもいなかった。29 ある者たちは、ユダが金入れを持っていたので、「祭りのために必要な物を買いなさい」とか、貧しい人々に何か施しをするようにとか、イエスが言われたのだと思っていた。30 ユダはパン切れを受けると、すぐに出て行った。時は夜であった。

「サタンが彼に入った」とあります。2 節にてヨハネは、「悪魔はすでにシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを裏切ろうという思いを入れていた。」と書いていました。この背後には、エバを惑わした蛇に働いていた悪魔が、今、イスカリオテのユダの中に入って、女の子孫(創世 3:15)イエス様を打つために動いたのです。

---

<sup>3</sup> <https://youtu.be/wutJUydxXgo>



しかし、主の言われたことは、「あなたがしようとしていることを、すぐしなさい。」でした。イエス様は「あなたのためにも、わたしは死にますよ」というありったけの愛情を注いでいたのです。しかも、弟子たちはその会話さえ何のことか分からなかったほど、他の人には分からないようにしてお語りになったのです。彼はその最後のチャンスを受け取らず、去って行きました。「時は夜であった。」とあります。これは、実際に夜だったのですが、闇の力が押し迫っている様子も醸し出しています。

何が闇なのか？それは、最大の愛である、あなたのためにわたしは死にますというその愛を拒み、退き、去って行くことです。ここまでの愛、裏切る者のなすままにご自身をゆだねて、その者のためにも死なれる愛、これを賜物として受け取らないことです。「ヨハ 3:18-19 御子を信じる者はさばかれぬ。信じない者はすでにさばかれている。神のひとり子の名を信じなかったからである。そのさばきとは、光が世に来ているのに、自分の行いが悪いために、人々が光よりも闇を愛したことである。」

## **2A 間もなく去られるイエス 31-38**

### **1B 互いへの愛 31-35**

31 ユダが出て行ったとき、イエスは言われた。「今、人の子は栄光を受け、神も人の子によって栄光をお受けになりました。32 神が、人の子によって栄光をお受けになったのなら、神も、ご自分で人の子に栄光を与えてくださいます。しかも、すぐに与えてくださいます。」

交わりから、イエス様に与えられた弟子たちの中から、ユダが出ていきました。ついにここで、13章の冒頭にある、「世にいるご自分の者たち」が残りました。そこで、イエス様はあらゆる愛をもって、ご自分の心を次々と弟子たちに明かされます。ユダに対しては敵に対する愛でしたが、他の弟子たちに対しては、ご自分のものとなっている者たちに対する愛です。

「人の子」と言われています。これはダニエル書 7 章にある、メシア、キリストについての預言です。「7:13-14 私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲とともに来られた。その方は『年を経た方』のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と栄誉と国が与えられ、諸民族、諸国民、諸言語の者たちはみな、この方に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」これだけ読めば、メシアが栄光と力をもって、ローマの力をも滅ぼす方として現れるように見えます。そして事実、キリストは力と栄光をもって現れます。しかし、主は、ご自身を人々のための贖い金として捧げられることによるのみ、ご自身のものご自身に初めて引き寄せることができるのです。旧約の預言者は、しもべたるキリストに栄光を現すことを語りました。「イザ 49:3 あなたはわたしのしもべ。イスラエルよ。わたしはあなたのうちに、わたしの栄光を現す。」

ここでヨハネが語っている人の子の栄光は、ここ、死に至るまで忠実な、しもべたるキリストの栄

光であります。この方が、人々の罪の供え物となってご自身を捧げられる、そのお姿に神の栄光が現れている、というのです。そのおぞましい苦しみと痛みのどこに、栄光が現れているのか？と思われるかもしれません。けれども、今、世界を見てください、歴史を見てください、十字架につけられたキリストの前にひれ伏し、この方をあがめている人々が、数限りなくいます。そこには、神の義が啓示されています。罪に対する処罰が、確かに正しく行われたことがわかります。自分の罪が身代わりに、イエス様の肉体で処罰されたことがわかります。それだけでなく、この方、イエスが神のキリストであり、神の独り子であられるのに、敢えてそのことを御心としておられたということです。それは、なんと罪を犯し、神に敵対している自分のために、そうしておられるのです！ここに神の愛があります。「ロマ 5:6-8 実にキリストは、私たちがまだ弱かったころ、定められた時に、不敬虔な者たちのために死んでくださいました。7 正しい人のためであっても、死ぬ人はほとんどいません。善良な人のためなら、進んで死ぬ人がいるかもしれません。8 しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます。」

そして使徒パウロも、自分の栄光は、誇りとすべきものは十字架であると断言しました。「ガラ 6:14 しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが、決してあってはなりません。この十字架につけられて、世は私に対して死に、私も世に対して死にました。」

33 子どもたちよ、わたしはもう少しの間あなたがたとともにいます。あなたがたはわたしを捜すこととなります。ユダヤ人たちに言ったように、今あなたがたにも言います。わたしが行くところに、あなたがたは来ることができません。

イエス様は、深い愛情を示して「子どもたちよ」と言われています。そして、ご自身が捕らえられる、わずか数時間の間、ともにいることができると言われます。そして、これからイエス様はずっと弟子たちに、ご自身が彼らからいなくなることを語られます。ご自身がなくなる間に、彼らがしなければならぬこと、またその間にも与えられる、もうひとりの助け主、聖霊の約束、父への祈りの約束など、再び会う時までのことを一心に語られます。

ご自身がなくなることについて、すでにユダヤ人たちには話しておられました。ユダヤ人たちは、何をいっているのかわからず、ギリシア人でも教えるつもりか？(7:35)、まさか自殺するつもりではないだろう(8:22)と話していました。

34 わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。35 互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるようになります。」

イエス様は、戒めを既に与えておられました。「互いに足を洗いなさい」ですが、互いに仕え合いなさいでした。主がその仕えるということをご自身を犠牲する愛から行うことをここで、語っておられます。同じ兄弟を敬い、愛することについては教えられていました。ここで新しいのは、基準です。「わたしがあなたがたを愛したように」であります。これは、キリストの愛、ご自身を罪人である私にさえ捧げてくださった、その偉大な愛を知っているからこそ集まり、愛し合えるという愛です。「15:12-13 わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。人が自分の友のためにいのちを捨てること、これよりも大きな愛はだれも持っていません。」命を捨てるほどの愛をもって愛し合いなさい、ということです。

そこで、「そんなことができるのか？」とってしまいます。初めから、自分たちのこれまでの力でやりなさいなどとイエス様は言われていません。それぞれが、自分のために死んでくださった主を知っている者たちが、その愛の賜物が与えられて、その愛を分かち合うことによって可能になるのです。聖霊によって注がれる、神の愛をもって愛し合うことによって可能です。教会の醍醐味はここにあります。今まではなかったものが、互いに集まることによって、そこに新しい共同体が生まれるのです。

先週、ある方がフェイスブックで興味深い投稿をしました。「これがクリスチャンの「新しい生活様式」「わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」<sup>4</sup> 専門家会議の先生方が、新しい生活様式と言った時に、私たちはいったい何のことか？と思いましたね。今までやったことのない生活の様式で生きていくことになりますよ、ということですが、愛し合うというのも、今までやったことのない領域でやって行きますよ、ということですね。

そして、何よりもこの愛があるから、キリストの弟子だと分かるということです。兄弟を愛していることが、まさに命を持っていることなのだと、使徒ヨハネは第一の手紙のほうで話しています。「Iヨハ 3:14 私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。兄弟を愛しているからです。愛さない者は死のうちにとどまっています。」イエスを信じるということは、その愛を知った人です。その愛を知ったのであれば、同じように神によって生まれた者、兄弟を愛するはずで、私たちは、他の場所でもサークルなど、仲間意識を持って集まることのできる場は多くあります。けれども、教会はただ一つの理由、キリストがこれほどまでに私を愛してくださった、ということを知って、それでその愛を知っている者たちと一つになっていることを知る場なのです。

## 2B 付いていけない弟子たち 36-38

36 シモン・ペテロがイエスに言った。「主よ、どこにおいでになるのですか。」イエスは答えられた。「わたしが行くところに、あなたは今ついて来ることができません。しかし後にはついて来ます。」<sup>37</sup>

<sup>4</sup> <https://www.facebook.com/kazunari.kikuchi.12/posts/3485469411481010>

ペテロはイエスに言った。「主よ、なぜ今ついて行けないのですか。あなたのためなら、いのちも捨てます。」<sup>38</sup> イエスは答えられた。「わたしのためにいのちも捨てるのですか。まことに、まことに、あなたに言います。鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言います。」

ペテロは、イエス様の愛の戒めを聞いたのに、頭の中は、「わたしは行く」とイエス様が言われたことでいっぱいでした。十字架の道はついてくることはできない、けれども、ご自身がよみがえられた後に、あなたはわたしにずっとついていくことになる、と言われます。けれども、ペテロは、足を洗われた時と同じように、中途半端が嫌いです。後ではなく、今もついていくようにしたいと言ったのです。

それで、「あなたのためなら、いのちも捨てます。」と付け足しました。いかがでしょうか？先ほどの戒め、愛し合いなさいと言われたところで、兄弟のためにいのちを捨てるほどのものということがあります。ペテロが今、それを言っています。ところが、イエス様は、「まことに、まことに、あなたに言います。鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしを知らないと言います。」と言われるのです。こんなものなのです、自分の愛はあまりにもちっぽけです。ペテロは、イエス様との強烈な出会い、その死からのよみがえりを知って、それで初めて聖霊の力によってのみ、この戒めに従えることを知るようになります。

ところで、ペテロは、ここでものすごく動揺します。それが分かるのが 14 章で、14 章は新しい話ではなく、そのままの続きです。「あなたがたは心を騒がせてはいけません。神を信じ、またわたしを信じなさい。」と続きます。これから迫りくる、大きなサタンからの試みに対して、イエス様はこうやって励ましの言葉をかけておられます。